

南・北両大東島を旅して

真玉橋クリニック 小方 明子



旅はいつもウキウキ感が伴う非日常であり、又雑多な際限のない家事からいっとき解放させてくれる贅沢な休日でもある。

今回はコロナ禍ではあったが、3回のワクチン接種を済ませた2組のご夫婦とバリバリのキャリアウーマンの友の5人が旅の道連れである。行先は一度は訪れたかった南・北両大東島!!

旅では美味しい食事に出会うことも楽しみの一つであり、北大東島でヒラメとアワビの養殖をしていると雑誌で読んだことがあったので、初日の夕食はヒラメとアワビの船盛りを特別注文することから旅の計画が始まった。待ちに待った3月19日午後休診にして2泊3日の連休を利用して旅にでかけた。13時10分の北大島行きのJAC・JT33Aの飛行機に搭乗し、那覇から360km離れた島には1時間で到着した。

南・北両大東島はサンゴ環礁が隆起してできた太平洋に浮かぶ珍しい断崖絶壁の島で、八丈島出身の玉置半右衛門が明治33年に南大東島に上陸し、更に3年後に北大東島に上陸したことから島の歴史が始まり、当初は南大東島では甘藷産業を、北大東島では燐鉱産業を事業化したとのことである。

北大東島飛行場には、今宵の宿の“ハマユウ荘”の送迎バスのお迎えがあり、宿に荷をおろし夕食までの3時間余りレンタカーで島巡りに出掛けた。運転担当はメンバーの一人でコンピュータ技師の心優しいロバートさん! 島民550人の島巡りの間、人にも車にも殆ど出会わなかった。まずは燐採掘跡地に行った。開拓時は燐鉱の島として繁栄し出稼ぎ者で人口4,000人にまでなったとのことだが今は手つかずの廃墟状態で、それ故に勝手に当時を回想でき、子供

の頃の線香花火はもしかしてこの島産だったかもしれないと空想逞しく縁を感じることができた。すぐ向かいに市場があったが、残念ながら休みの為建物周りの草花を愛でるだけとなってしまった。国内外の旅では必ず市場巡りをするのが楽しみの一つとなっており、今回は2島とも市場巡りはできず今振り返っても心残りである。次はYさんのカボチャ畑へ! 3月はかぼちゃの収穫時期でこの島から当クリニックに通っている患者のYさんと、当日畑で待っていると約束したもののカーナビで探すわけにもいかず、どうしたものかと考えあぐねていたら、通りすがりの商店の女主人がなんとYさんの畑まで案内してくれた。感謝感激!! 畑では診察室では見たこともない素敵なお笑顔でYさんはカーボーイのようなかっこいい旦那様とカボチャをキャリトラックに積み込んでおり、この畑のずしっと重たい艶のいい“えびすカボチャ”を何人かの友人にお土産にしたが、こんな美味しいカボチャは初めてと大好評だった。その後行った“秋葉神社”は素朴な神聖な社で前には土俵らしきものが作られており、相撲大会を楽しみながらの、年一度の賑やかな島のお祭りの気配を感じることが出来た。又この島生まれの私の友人は一時間かけての小・中学校の通学の登下校時にこの神社に必ずお参りしたとのこと、彼女が教職退職後ハワイマラソンを完走できた健脚はこの通学路のおかげだったのだと幼少期に鍛えることの大切さを痛感した。

翌日は昨夜の夕食のヒラメとトコブシの養殖場を訪ね、大きな水槽に大中小のヒラメが分類され所狭しと寝そべっており、このヒラメが食材だったのかと思うと何とも言えない光景で気



を取り直して、次は“沖縄海”へと向かった。島で唯一海が身近な場所で、たまたま到着した時間帯は干潮でどっしりとした天然の“潮溜まりプール”となっており、その雄大さに感動した。若い頃黒島の“潮溜まりプール”でシュノーケリングした時は、深いサンゴ礁がそのまま残り大小の美しい熱帯魚と泳いだことが美しい思い出となっているが、この荒々しい海の自然のプールでは満潮時はもしかしてカツオ・鯖・アジ・イワシ etc が泳いでいたのだろうか？と夢想し、若かったらきっとこの天然そのもののプールで泳ぐためだけに再訪した筈と、何故かワクワク、ドキドキと心躍る風景だった！！

その後は北大東島に別れをつけ、14時40分発の飛行機で南大東島に向かい、20分余りで到着した。“ホテルよしごと”に荷をおろし、誰もがお勧めの観光スポットである鍾乳洞“星野洞”に直行した。高低差のある広大な空間には見たこともない荘厳な宮殿のような神聖な鍾乳洞が広がり、自然の圧倒的な力強い美しさに畏敬の念を覚え、今まで見た中で一番素晴らしい鍾乳洞だった。宿に戻り楽しみにしていた夕食はコロナ禍の為、残念ながら部屋での折詰の

お弁当だった。夕食後は広いレストランを借り切って6名でチキンフットゲームに興じ、ロバートさんが持ちこんだ大瓶の赤ワインが空になる2時間余りわいわいキャーキャーと旅の解放感も加わりいつもより楽しむことができた。翌日は旅の目的であるラム酒工場見学に出かけた。原田マハ著“風のマジム”の小説は沖縄電力の派遣社員だった若き金城祐子さんが社内ベンチャー制度に応募しラム酒造会社を設立するまでを題材にした小説であるが、南大東島の工場を試飲したいとの念願が叶い、初めてストレートで飲んだ“コルコル”はサトウキビが原料の為思いの外優しい喉越しで美味しかった。沖縄産のラム酒が世界に羽ばたく日が待ち遠しい。旅の終わりの昼食に（大東島そば）と（サワラの握り寿司）を食べることができ本当に大満足の旅だった。コロナ禍で外国旅行ができない今、次は日本海のお魚を食べに隠岐の島への旅を計画している。

（人生は思い出作りの旅）これからも沢山の旅に出かけたい。とりとめのない旅行記を読んで下さりありがとうございました。

原稿募集

プライマリ・ケアコーナー (2,500字程度)

当コーナーでは病診連携、診診連携等に資するため、発熱、下痢、嘔吐の症状等、ミニレクチャー的な内容で他科の先生方にも分かり易い原稿をご執筆いただいております。

奮ってご投稿下さい。

随筆コーナー (2,500字程度)

随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。

なお、スポーツ同好会や趣味の会(集い)などの自己紹介や、活動状況報告など、歓迎いたします。

原稿送付先

〒901-1105 南風原町字新川218-9 沖縄県医師会広報委員会宛

E-mail: kaiho@okinawa.med.or.jp

※原稿データは、出来ましたらメール送信又は電子媒体での送付をお願い申し上げます。